

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 室町物語研究

—絵巻・絵本への文学的アプローチ—

氏名 澤井 耐三

本論文は、室町時代から江戸時代前期にかけて数多く作られた御伽草子作品のうち、主に室町時代成立ないしはその時代の傾向を色濃く残す作品十数編を取り上げ、それぞれの作品が持つ特徴や独自性、さらには時代的な意味などを探求した、作品論の試みである。

最初に掲げた「御伽草子にみる「富」について」の論は、御伽草子作者が、室町から江戸初期にいたる時代の現実をどのように捉えていたのかを、「富」という視点から検証しようとしたものである。室町期には既に多様な産業が興り、『七十一番職人歌合』に描かれたように庶民の営利活動も盛んで、貨幣経済の著しい進展が見られたが、御伽草子は必ずしもその力強い現実を描き切れていない。御伽草子が描く致富の道筋を、『文正草子』や『大黒舞』などに見る神仏を背後にした呪的な感性、『福富草子』に見られる富の喪失と諷刺の精神、あるいは『筆結の物語』の商行為の教訓や『鴉鷲合戦物語』の投機的蓄財法の記述などを分析しながら、御伽草子の現実的な世界の把握の方法について論述した。

第一章では、室町初期ごろの成立とされる『善教房絵詞』（重文）ならびに『福富草紙』（重文）、室町中期の『おようの尼』の三つの絵巻作品を取り上げ、本文とともに絵にも注目し、作品分析の手がかりとした。

『善教房絵詞』は、善教房がさまざまな階層の人々に念仏や遁世を勧めるのに対し、人々はあれこれと反論して抵抗する内容。本稿は、善教房が示す天台浄土教の教説や無常観、あるいは殺生や食肉の罪障観、雇い主に対する人々の不満等を吟味し、当時の宗教の性格や庶民の意識を考察した。この作品は、従来、唱えられてきた浄土真宗の宣揚などではなく、説法の困難さを描こうとした作品であろうことを提示した。

『福富草紙』の論は、放屁の芸に失敗して打擲される福富の悲劇を描い

た作品であるが、保刀禰^{ほうとね}として権力の側にあった福富が、見下していた男の幸運を羨んで失敗するという物語の構造には、権威失墜を嘲笑する庶民の下剋上と諷刺の意図が込められていることを指摘した。

『おようの尼』の論は、室町時代成立の絵巻の最終部に書き込まれている謎めいた梵字を読み解くことによって、この物語が本来、男女の救済を描く宗教的な物語であったこと明らかにし、市井の一隅に生きる庶民のひたむきな人生について考察した。従来、滑稽、諷刺の物語とされてきた同名の奈良絵本（霞亭文庫本）との比較を通じ、宗教的な発心譚が笑話へと変容していく道筋についても言及した。

第二章では、宗教的な色合いの濃い『毘沙門の本地』と『宝蔵絵詞^{ほうぞう}』を取り上げた。宗教的といっても、教義的な仏教ではなく、室町人の心に強く作用していた民間信仰的な仏教が、取り込まれている物語である。

『毘沙門の本地』は、主人公が、幽冥境を異にし、天上はるかな梵天王宮に住む最愛の妻を訪ねて、天空を飛翔、遍歴する物語で、夜空を渡るたびに出会う牽牛星、七夕、夕つづ、北斗七星、明けの明星、月、太陽などに行き先を尋ねている。これらの星々には、七夕説話、虚空蔵信仰、月待ち行事等、さまざまな伝説や宗教的寓意が付与されており、本稿はそうした庶民の間に流布していた伝承の数々を実証するとともに、童話的な物語の構造との関連について考察した。

『宝蔵絵詞』は、熊野参詣路、九十九王子の一つである切目王子^{きりめ}をめぐる物語で、粗野な行為により熊野権現から放逐され、荒ぶる神となった切目王子が、稻荷社の阿古町^{あこまち}という女神の願いを聞き入れ、豆の粉を顔に塗る化粧をした熊野参詣者の福は奪わないと約束する内容である。豆の粉化粧は応永三十四年、実意の『熊野詣日記』記事により、実際、切目王子社で行われていた風習であったが、本稿では『諸山縁起』『両峯問答秘抄』など各種の資料を援用しながら、荒神、愛法神、切目王子などの伝承が、本作品においてどのように物語化されているかを分析した。

第三章では、御伽草子の異類物の代表作である『精進魚類物語』と『鼠の草子』を検討した。

『精進魚類物語』は、食品である精進物と魚類とが繰り広げる、架空の合戦を滑稽に描いた物語であるが、そこに登場する野菜や果物、魚類など

には呼称や特徴に因んだ様々な擬人名が付されている。本稿二編は、これらの擬人名の根拠となった用例を室町期の資料類から博捜し、時代との関わりを考えるとともに、その滑稽の内実を考察した。

『鼠の草子』の論（二編）は、幾種類もある『鼠の草子』諸本の中から、絵巻物として伝わる天理図書館本、桜井氏本、サントリー美術館本（他三本）の『鼠の草子』について、嫁入り行列、台所風景、働く者たちの会話、酒の名、提灯等の記述を比較、検討し、諸本間における笑いの特徴や、成立時期の違いによって生じる内容の変容などを考察した。

「幻の『鼠の草子』」の論は、手書き原稿と古書店目録の写真という間接資料によるものであるが、未紹介のテキストでもあり、特に巫女の口寄せ詞章には他に例を見ない珍しい叙述が含まれており、検討を加えた。併せて、この物語の復元を試みた。

第四章には、『磯崎』『常盤の姥』『ささやき竹』『しぐれ』の四編の論を掲げた。しいて纏まりを付ければ、女性にかかわる御伽草子作品とすることができる。妬婦の肉付き面を扱った『磯崎』の論では、女人教戒の狂歌、妬婦の説話、女人救済の血盆経などについて解説を施し、女は価値の低いものとする男の偏見と身勝手な論理の内実を考察した。偽経「血盆経」に関連して、江戸期のものながら版木、刷り物、縁起の資料を掲出した。

『常盤の姥』は、連れあいを亡くし孤独を嘆く九十歳余の老女の愚痴を写した物語である。子供や孫からも冷遇される姥が、往生を願って唱える念仏の間に、食べ物の名を連呼し、子供たちの不親切を非難し、自らを美化した過去を語るなど、子供たちに当てつけた現実的な欲望が顔を出し、落語の「小言念仏」のような滑稽が描かれている。本稿は、そこに描かれた仏教や孝行の観念、古典作品の言辞等を検討し、滑稽譚、往生譚である側面とともに「孝」の教訓の書でもある性格を指摘した。

『ささやき竹』は、奸計を用いて女性を寺に連れ込もうとした老僧が、彼女を運び込んだ箱の中身が入れ替わっていて、牛が出てきたのに驚くという話で、既に鎌倉時代、無住の『雑談集』にその原話が載り、その他の説話集にも類話が見えていることは、従来指摘されてきた。本稿では、その原話を増補、改変し、若い男女の恋愛成就の物語に作り直した広本系『ささやき竹』を考察の対象とし、前半部が『鳴門中将物語』の構想を剽窃していること、また後半の悪僧懲罰の描写には当代的な事柄の反映があるこ

となどを指摘しながら、説話の物語化という方法について考察した。

『しぐれ』という作品は、別離を余儀なくされた相思相愛の男女が、やがて女は后になり、男は再び結ばれぬ運命を悟って出家するという悲恋の物語である。擬古物語『あきぎり』『しのびね』など、いわゆる「しのびね型」と称される系列に繋がるもので、本作はその簡略版の様相を示している。本稿では『しぐれ』に見える二つの特異な趣向、すなわち一つは時雨の中での男女の出会い、もう一つは「男祭」という呪詛について考察した。時雨の折の出会い場面については、『木幡の時雨』と比較して差異の様相を考察し、また、男が恋人を忘却してしまう男祭という呪詛については『新猿楽記』や「祭文、男祭女祭の文」(『高山寺資料叢書』17)、夫妻和合祭文(『元興寺編年史料』)などの例証を通じて、その現実性を考えた。

付編として、謡曲『檜しきみ天狗』、狂言『富士松』の論を掲げた。前者は、主人公が六条御息所と名乗っていることから、『源氏物語』の六条御息所の墮地獄の様相を描いたものとされてきた。本稿はこれを否定し、『京城万寿禅寺記』などの記事により、院政期に実在した、白河上皇の娘、郁芳門院ていし媞子であることを証明した。歌合や田楽の愛好など、媞子をめぐる種々の伝説を検討し、清浄身の慢心から天狗道に墮ちた伝説が、『檜天狗』の本話であることを論じた。

後者は、富士山に参詣し富士松を持ち帰った太郎冠者が、その松を主人に取り上げられそうになるが、強く抵抗するという狂言で、その題材となった富士松が、室町時代いかに珍重されたものか、史料を通じて検証し、また太郎冠者の逆襲の鋭さについても言及した。

最後に、他に伝本がない未翻刻の桜井健太郎氏蔵『鼠の草子』と、ベルリン国立図書館東アジア部蔵の『月王・乙姫物語』の絵巻二点の翻刻(校訂本文)を掲げた。

本稿においては、各論を総括する論は置いていない。一括して論ずるには、御伽草子というジャンルは余りにも多様であり、豊饒である。ここに取り上げた作品は、御伽草子四百編ほどの作品群からみれば極少でしかない。個々の論によって室町期の物語の豊饒を確認してもらえることを期待した。物語の分析にあたり、作品ごとに語彙や表現、時代背景などを実証的に検証するように心がけた。